

序

『経済思想史』と題したこの本は、経済学とその周辺の思想の生成発展の過程を古代・中世から近代を経て現代に至るまでを描いている。経済学の専門分野としては「経済学史」「社会思想史」がポピュラーであるが、あえて「経済思想史」としたのは、それなりの意味がある。「経済学史」は——狭い意味で捉えられてしまうと——現代経済学の形成過程を知ってそれをより深く理解するという目的に絞られることがあり、逆に、「社会思想史」は、社会についての過去の思想を辿って現代社会の肯定・否定両面を考えるための有益な示唆や観点を得るものであるが、経済・経済学への着目が薄れることがある。なので、この本はむしろ両者を結合して、それぞれの弱点を補うとともに利点の相乗効果を狙うものである。つまり、幅広い経済学史であり、経済に着目した社会思想史でもある書物を読者の皆さんに提供したい。

幅の広さとしては、古代から始めている時間的な長さを言うことができるし（第1章）、内容面では、アダム・スミスを取り上げる際も『国富論』（1776年）のみならずその基盤をなす彼の社会心理学『道徳感情論』（1759年）も説明していること、また直接的に現代の経済学それ自体の理解に役立つわけではないロマン主義（第5章）なども含めていることが挙げられる。例えば、ロマン主義のアダム・ミュラーは、産業力に支えられた商工業が社会を席卷すると過去・未来の世代の「自由」がないがしろにされると主張しており、これは現代経済学そのものの理解を助けるわけではないとしても、環境問題での世代間倫理を考える現代人に興味深い示唆を与えてくれる。その他、資本主義を構造的に分析・批判して実際に社会主義国家を作り出すに至ったマルクスの経済学や社会民主主義の系譜も入れておいた（第7章）。

他方、とくに現代の経済学がどのような構造をもっているかを理解したい読者の方々には、1870年代の「限界革命」（第8章）から始まった現代経済学の系譜が重要である。限界革命後においても失業対策として政府による経済への介入の必要性を強調するか（ケインズ）、自由競争を重視するか（新古典派）、で見

解が分かれるし(第9章)、経済学が一般妥当的な数学で表現されればされるほど、数量化のむつかしい国民性や文化・慣習・制度の多様性を経済学に入れようと試みた制度学派経済学や進化経済学もある(第10章)。

これらはもっとさかのぼることができる。経済への政府の介入の必要性はすでに17～18世紀の重商主義で説かれていたし(第2章)、それを乗り越えようとしてスミスが自由競争の経済システムを構想し(第3章)、その経済学がイギリス古典派として価値・地代・人口などについて展開されていった(第4章)。また国民性や制度の相違に経済学が対応すべきことも、すでに19世紀の歴史学派の経済学で論じられていた(第6章)。それ以外にも、現在まさに熱い戦いが見られる自由貿易論に対する保護関税の主張は、19世紀前半にフリードリヒ・リストが当時ワールドスタンダードのイギリス古典派の自由貿易論に対して提唱した保護主義にその端緒を見ることができる(第5章)。つまり、現代の経済学での様々な議論は、より深く根っこから理解しようと思えば、これらにさかのぼって探っていくのが望ましい。

ただし、残念ながら、250ページ余りの(手軽に購入可能な価格の範囲での)小さな本では、本論ではヨーロッパの経済思想史の大きな流れを描くことで精いっぱいだった。いや、ヨーロッパでさえフランスの重農主義に節さえ設けられなかったことは悔しい。ただ、本論で扱えなかった次の2つのテーマについては補論として末尾に加えた。ひとつは、日本の経済思想の歴史を少なくとも江戸時代末期から明治期にかけて描くことであり(補論1)、もうひとつは、現代の経済学は物質的・数量的な利益極大化をガリガリ亡者のように追求する人間像「ホモ・エコノミクス」をモデルにしてしまっていないか、という問題提起である(補論2)。

以上のなかで各章の特徴を簡単に述べたが、読者の皆さんはご自分の関心に応じて、どの章から読み始めていただいてもかまわない。本書は学術的な研究書というよりも、学びの見地から、皆さんにひとつひとつの経済思想を説明して現代との関連を考えていただくためのテキスト・読本となることを目指した。過去の経済学・社会思想を——「学」になりきっていない「思想」も含めて——その当時の社会状況のなかでの意味との関連で解き明かすことが本書の基本であり、そのうえで、現代的な意義をワサビのように付け加えておくことを

目標として執筆者の方々にはお願いした。それがどれだけ成功してしているかは、読者の皆さんの判断にゆだねるしかない。

私たちはベースとなる味にピリッとしたワサビのアクセントをほどこした叙述を味わっていただき、かつ自らの思考の栄養としていただければ、と願っている。時代状況と格闘した学者・思想家たちの思索の跡を明らかにするからこそ、その素材を生かした料理（叙述）を皆さんにお出しできる、というのが私たちのポリシーである。個々の経済思想を荒い状態でテーブルに並べて出すのではなく、それぞれのテーマを研究する気鋭の執筆者たちが、大学教員としてのプロの技でもって調理し、読者の皆さんに美味しいところをお示ししているので、安心して口に入れて、いや頭と心に入れていただけることを心から願っている。

2025年3月3日

桑名にて

編者 原田 哲史